

国際ミツバチ研究協会



文献紹介

Bee World 77 巻 1 号 (1996) には 5 編の論文が寄せられている。

第 6 回の IBRA 熱帯ミツバチ会議が 8 月に開催されるコスタリカの養蜂事情、ハナバチ事情について Sommeijer の特別寄稿があり、この中で、マヤ文明ですで見られたハリナシバチによる養蜂から、新大陸発見後のセイヨウミツバチの導入と成功、その後の凶暴なアフリカ蜂化ミツバチの席卷によって再びハリナシバチが見直されるに至った現状を述べている。

Cheng et al. は「ミツバチのプロポリス：医薬品としての期待」と題した総説で、効果が話題のプロポリスについて特に主成分であるフラボノイド類、様々な薬効の注目されるカフェイン酸フェネチルエステル類について抗菌、防黴、制がん効果などについて触れている。

Matheson は 1993 年に **Bee World** (74 巻 4 号) 上で発表し、1995 年 (76 巻 1 号) に増補改訂をした「世界のミツバチ健康白書」のさらなる増補を行っている。今回は地図はなく、主要な病気、ダニ類についてこれまで報告のなかった地域からの最新の報告を加えた形で、日本に関しては新しい情報はない。

Sugden et al. は「ミツバチと土着ハナバチの競合—オーストラリアにおける環境変化と養蜂の影響に焦点をあてて—」と題して、最近物議を醸した、導入種であるセイヨウミツバチが土着のハナバチ類に与えた影響について、117 編の文献を証拠として解説し、養蜂家、研究者、土地の管理責任者への提言を述べている。

Showler は前号 (76 巻 4 号) に続く「英国における国立養蜂協会の発展」の第 2 部として、1940 年から 1990 年までの同協会の活動経緯

を紹介している。

この他 “science round-up” のコーナーでは昨年 IBRA で開催されたシンポジウム「趣味と実益のマルハナバチ」を受けて、Osborne がマルハナバチ利用の現状を報告している。

Journal of Apicultural Research 34 巻 4 号 (1995) は 5 編の論文と巻末索引を掲載。

Silva Matos and Garofalo は「マルハナバチ無王群の発達」について、マルハナバチ *Bombus atratus* の無王群で、最大の雌が優位となり (擬女王蜂)、交尾をして、雌の子を生産する過程について報告している。コロニーの発達とともに産卵数は増えるが、これは擬女王蜂の産卵間隔が短いことと、後に働き蜂による産卵が始まることにもよる。働き蜂産卵は、擬女王蜂が未受精卵を産卵し始めてから始まった。次世代の女王蜂すべてと働き蜂の約 31% がこの擬女王蜂によって生産された。したがってこのマルハナバチでは女王蜂の喪失はコロニーの発達を制限することはない。

Martin は「セイヨウミツバチの巣房内に母ダニが 1 匹以上いるミツバチヘギタダニの増殖とこのような巣房の分布」について報告している。これによれば、巣房内で育つダニの数の最大値は雄巣房で 16 匹、働き蜂巣房で 8 匹であったが、母ダニ数が増えるに連れて 1 匹当たりが産む卵の数は減少する傾向にあった。母ダニ間での競争は問題にはならないようだが、生まれた子同士の競争、吸血する部位をめぐる競争は次世代の死亡率に影響していた。

Apicultural Abstracts 47 巻 1 号 (1996) には文献番号 1/96~400/96 間での 400 編が収録されており、このうち日本からは 13 編の論文が掲載されている。

Apicultural Abstracts 47 巻 2 号 (1996) には文献番号 401/96~788/96 間での 388 編が収録されており、このうち日本からは 20 編の論文が掲載されている。

(川崎 史子)